

鉄砲汁

野村胡堂

—

「親分、近頃金の要るようなことはありませんか」

押詰ったある日、銭形平次のところへノツソリとやって来たガラツ八の八五郎が、いきなり長い顎あごを撫なでながら、こんなことを言うのです。

「何だと？ 八」

平次は自分の耳を疑うような調子で、長火鉢ながひばちに埋った顔をあげました。

「ヘツヘツ、ヘツヘツ、そう改まって訊かれると極りが悪いが、実はね、親分。思いも寄らぬ大金が転がり込んだんで」

「大きな事を言やがる。お上の御用うけたまを承うけたまわる者が、手弄てなぐさみなどしちやならねえと、

あれほどやかましく言つて居るじゃないか」

「博奕ぼくちなんかで儲けた金じゃありませんよ、飛んでもない」

ガラツ八は唇くちを尖とがらせて、大きく手を振りました。

「それじゃ、富籤とみくじか、無尽か、——まさか拾つたんじやあるまいな」

「そんな氣のきかない金じゃありませんよ、全く商法もうで儲けたんで」

「何？ 商法？ 手前てまえがかい」

「馬鹿にしちやいけません、こう見えても算盤そろばんの方は大したもので。ね、親分、

安い地所でもありませんか、少し買つて置いてもいいが——」

「馬鹿野郎、二朱や一分で江戸の地所が買えると思つているのか」

「二朱や一分なら、わざわざ親分の耳には入れませんよ。大晦日おおみそかが近いから、

少しは親分も喜ばしてやりてえ——と」

「何だと？」

「怒つちやいけませんよ、ね、親分。錢形の親分は交りつけのねえ江戸っ子だ。

不断は滅法威勢がいいが、宵越よいごしの錢を持ちつけねえ氣前きめえだから、暮が近くなる
と、カラだらしがねえ。さぞ今頃は青息吐息あおいきといきで——」

「止さねえか、八。言い当てられて向っ腹を立てるわけじゃねえが、人の面つらを
マジマジと見ながら、何てエ言い草だ」

平次も呆氣あっけに取られて、腹を立てる張合いもありません。それほど、ガラッ
八の調子は、ヌケヌケとして居りました。

「箱根じゃ穴のあいたのを立用したが、今日のはピカリと来ますぜ。親分、こ
の通り」

そう言いながらガラッ八は、内懐から抜いた野暮やぼな財布ぎやくを逆にしごく、中
からゾロリと出たのは、小判が七八枚に、小粒、青錢取交ぜて一ひと掴みつかほど。

「野郎、何処からこれを持って来やがった」

平次は矢庭に中腰になると、長火鉢越しに、ガラッ八の胸倉むなぐらをギューツと押えたのです。

「あ、親分、苦しい。手荒なことをしちやいけねえ」

「何をッ、この野郎ッ。何処で盗んで来やがった、真っ直ぐす白状しやがれッ」
平次の拳こぶしには、半分冗談にしても、グイグイと力が入ります。

「盗んだは情けねえ、親分、こいつは間違いもなく商法で儲けた金ですよ」
ガラッ八は大袈裟おおげさに後手を突いて、こう弁解をつづけました。

「岡っ引に商法があつてたまるものか。盗んだんでなきや、何処から持って来た。さア言えッ」

「言うよ、言いますよ、——言わなくてどうするものですか、——おう痛てえ、喉仏のどぼとけがピリピリするじゃありませんか」

「喉仏の二つや三つローズにしたって構うことはねえ。さア言え」

「驚いたなア、持ちつけねえ金を持つと、喉仏のどぼとけに祟るとは知らなかったよ」

「無駄はもう沢山だ。金を何処から出した、それを早くブチまけてしまえ」

平次が躍起やつきとなるのも無理のないことでした。正直と馬鹿力を取得のガラツ八が、万々一、その頃の岡っ引の習慣しゅうかんに引摺り込まれて、うっかり役得でも稼かせぐ気になったら、貧乏と片意地を売物にして来た、平次の顔は一ぺんに潰つぶれることでしょう。

「親分、心配するのも無理はねえが、これは筋の悪い金じゃありません。実は親分も知って居なさるあっしの赤鯰あかいわしを、望み手があつて売ったんで」

「何？ 手前てまえの脇差を売った？」

「へエ——去年の暮、柳原の古道具屋を冷かし損そこねて買った、あの脇差が、十両になるとは思わなかったでしょう」

ガラツ八の鼻は蠢うごめきます。

「手前が二分で買って、ひどく腐くさって居たあの脇差が、十両になったというのか」

「その通りですよ、親分。あの脇差を見た人があって、恐ろしく錆さびびて居る上に無銘むめいだが、彦四郎貞宗さだむねに間違まちがいはない、もし間違まちがいだったら、俺の損そんということにして、現金十両で買うがどうだ、という話でさ」

「フーム」

「本当に貞宗だった日にや、十両で売っちゃ大変そんに損だから、一日待って貰もらって、知り合いの刀屋を二三軒当って見ると、——飛んでもない、そいつは備前びぜん物もので、彦四郎でも藤四郎でもある筈はねえ。その上日本一の大なまくらだから、鍋なべの尻しりを引ひつ搔かくより外ぐわいに役に立たない代物だ。望み手があるなら、拵こしらえごと一両で売っても大儲おほもうけだ——と言うんで、思い切きって手離てりしましたよ、親分」

「呆あきれ返かえった野郎だ。手前はその刀屋の鑑定めきぎを、相手に言いわなかつたのか」

「言いましたよ。念入りに輪をかけて言つてやったが、相手は少しも驚かねえ——彦四郎貞宗でなきや、師匠の五郎入道正宗だろう。せつかく見込んだ品だから十両が二十両でも買つて置きてえと斯うだ」

「ね、親分。こんな正直な商法はないでしょう」

「生れて初めて入つた十両の金だ。一人で費つかつちや冥利みょうりが悪いから、取りあえず親分に見て貰うつもりで持つて来ましたよ。ね、何んかこう役に立てるような口はありませんか、親分、差当り払う当がなかったら、地所を買うとか、家を建てるとか——」



ガラツ八は悉くいい心持でした。七八枚の小判を畳の上へ並べたり、重ねたり、チャリンと叩いて見たりするのです。

「止してくれ、俺はその音を聞くと虫が起きるよ」

「へッ、まけおし負惜みが強いね、親分」

「馬鹿な野郎だ。八両や十両で、江戸の真ん中に家が建つ気で居やがる」

「家なんか建たなくなつて構やしませんよ。これだけありやだいふくもち大福餅を買つても、ずいぶん出がありますぜ」

「呆れて物が言えねえ、——だがな、八。見す見す大ナマクラと知つて、手前の脇差を十両で買うのは少し変じゃないか」

「変じゃありませんよ。気に入りや、びつしうま跛馬だつて買いますよ」

「待ってくれ、——こいつは少し臭いぞ」

銭形平次はもういちど長火鉢に顔を埋めました。暮のやり繰と違つて、こい

つは何うやら思案の仕甲斐しがいがありそうです。それを真似するともなく、八五郎も高々と腕しまぬを拱きました。

畳の上に並べた七八枚の小判も、何となく引込みのつかない姿です。

二

「八、近頃何か変なことがありやしなかつたか」

平次は改めてこう訊きました。

「変な事？」

「例たとえば、手前が嗅たぎ出した犯人ほしとか、腑ふに落ちないと思つた事とか——」

「ありませんよ」

「何かの証拠を握るとか——」

「なんにも握りやしませんよ」

ガラツ八はあまりにも屈託くつたくのない顔です。

「そんな筈はないが、——待てよ、その、手前から脇差を買ったのは誰だい」

「浜町の吉三郎、——遊び人で」

「吉三郎なら知っている。賭事かけごともしない様子だが、妙に金廻りのいい野郎だ、

——その吉三郎と何処で知合になつた」

「髪結床かみゆいどこで、——あつしとちようど互先たがいせんという碁ごですよ」

「手前、浜町まで顔を剃ありに行くのかい」

「いえ、吉三郎の野郎が町内の錨床いかりどこまで来るんで、——あすこの親方の剃刀かみそりが

たまらねえって」

「錨床いかりどこの親方は、鬚まげはうまいが、剃刀は下手へたじゃないか」

「あつしもそう思うんですがね」

「ところで、吉三郎は、何か手前に頼みはしなかつたか」

「いいえ」

「少し変だな、八。脇差わきざしを売った時、何か言った筈だと思うが——」

平次の問いは次第に核心かくしんに触れて行きます。

「言いましたよ、あつしの煙草入れの根附ねつけを見て、そいつは気に入ったから、脇差といっしょに譲ゆずってくれ——つて」

「あの牙彫けぼりの——」

「どうせ浜町河岸で拾った品だから、脇差へおまけにつけましたよ」

「浜町で拾った？」

「へえ——」

ガラッ八の話は少し変って居ります。——『一と月ばかり前、夜釣よづりに行った
帰り、白々明けの浜町河岸に船を着けたことがあります。そのとき自分の船

より一と足先に岸へ漕ぎ寄せた伝馬が、炭俵と米俵を二十五六俵陸へ揚げて、サッサと大川を漕ぎ戻ったのを見てみると、足元の石垣の上に、牙彫の円いものが一つ、危うく水に落ちそうに引掛つて居た』——というのです。

拾つて見ると。ちようど手頃な根附で、真中に穴まであいて居りますが、彫刻は怪奇を極めて、唐草模様と鬼のような縮つ毛の人間の首と、それから得体の知れない髯文字がベタ一面に彫つてあつたのを、暢気なガラツ八は、自分の煙草入れに附けて、そのまま腰に挟んで歩いて居たのでした。

「何だ、拾つたものをそのまま腰へブラ下げて居たのかい」

平次も少し呆れましたが、今に始めぬガラツ八の暢気さが、腹を立てるにしても、少し馬鹿馬鹿しかつたのです。

「どうせ馬の骨か牛の骨に細工をしたものですよ。吉三郎は三拝九拝して持つて行つたが、あんなものが何かになりますか、親分」

「呆れた野郎だ」

平次は誰へともなくこう言いました。

「こんな事が商法になるなら、江戸中の古道具屋を漁あさって、安物の脇差をうんと買い集めようかと思うが、どんなもので」

「いい加減にしないか、八。吉三郎の狙ったのは、赤鯛あかいわしじゃなくて牙彫けぼりの根附だったかも知れないな——とにかく、十両の金を持って行って、脇差と根附けを買い戻して来るがいい」

「三日も前のことですよ、親分」

「三日前だって、三年前だっていいじゃないか」

「十両の金が、三日もあつしあつしの手に無事で居るわけはないじゃありませんか」

「仕様のねえ野郎だ、いくら費つかったんだ」

「店賃たなちんと米屋酒屋の払いと、煙草を一つと大福餅を十六文買って、一両二分と

六十八文」

「いやに刻きんみやがったな、——お静、一両二分と六十八文、お前のところにな
いか」

平次はお勝手の方へ声を掛けます。

「お前さん、——そんな事を言つたつて」

お静の声は口の中に消えました。差さし迫せまる大晦日おおみそかを控ひかえてここも大世話場の真
最中さいちゆうだったので。

「気のきかねえ事を言うな、何のために質屋しちやが暖簾のれんを掛けて置くんだ。俺おれの着き
換かえをそつくり持つて行きや——」

「でも、あと三日で年始ねんしまわ廻りじゃありませんか」

「この正月は風邪かぜを引くことにするよ」

「——」

お静は黙って出て行った様子でした。

「済まねえ、親分」

ガラッ八は萎れ返って、平手で額を叩いて居ります。

「こいつは罨わなだったのさ、八。これからも気をつけることだ、——なアに、お静のことなんか心配することがあるものか、こちとらの女房は、貧乏や十手には馴れっこだよ」

平次はそう言ってカラカラと笑うのでした。

三

「た、大変だ、親分」

「また大変の大安売が来やがった、——何だい、八」

十両に纏まとめた金を握って、浜町の吉三郎のところへ駆けて行つた筈の八五郎が、半刻はんときも経たないうちに、面食くらつた旋風つむじかぜのように舞い戻つて来たのでした。

「こいつは驚くぜ、親分。吉三郎がゆうべ死んだんで」

「何？」

平次もさすがに立ち上がりました。

「下手人は鉄砲汁てっぽうじるさ」

「河豚ふぐの毒にやられたのか」

大きな失望が、平次の顔をサツと翳かげらせます。

「友達が三人で河豚鍋を突つつきながら、一杯やらかしているまではよかつたが、その晩吉三郎が毒に中つて、七転八倒の苦しみ、夜明け前に息を引取つたということですよ」

「あとの二人は何うした」

「無事だったそうで」

「誰と誰だ」

「そいつは聞かなかった」

「行ってみよう、八。どうも俺には腑ふに落ちない事だらけだ」

平次は帯を締め直して、草履ぞうりを突っかけました。

「河豚で死んだと解つても———ですかい、親分」

「河豚だっているいろいろあるよ。後学のためだ、一緒に来るがいい」

二人はそのまま、浜町の吉三郎の家へ飛んだことは言う迄もありません。

吉三郎の派手な生活くらしに似ず、家は至って地味で、贅沢ではあるが、何となく粹いきじの好みでした。附合つきあいがあまりなかったものか、集まって居るのは、ほんの近所の人達が二三人。それも平次とガラツ八の姿を見ると、妙に掛り合おそいを懼おそれるように、コソコソと姿を隠してしまいます。

「飛んだことだったな、お神さん」

「ま、銭形の親分さん。飛んだことになってしまいました」

女房のお由。二十五六の良い年増が、顔を挙げることさえ出来ない様子で、逆さ屏風びょうぶの中に泣き崩くずれて居るのでした。

「ゆうべの客は誰と誰だい」

平次は形ばかりの線香をあげてから、こう静かに訊きました。

「それが、よく、わかりません」

「はて？」

「ちよいちよい見かけるお顔ですが——」

「年の頃は」

「二十七八と五十二三」

「河豚ふぐは何処から買ったんだ」

「年を取った方のお客が持って来ました。竹の皮包みにして、——今日漁ったばかりのを、知合からわけて貰って来たが、よく洗ってあるから大丈夫だ——と言つて」

「確かに三人で食つたのだね」

「それはもう間違ひありません、大層おいしいから、私にも是非とすすめましたが、私は河豚ふぐと雲丹うには我慢にもいけません」

「二人の客が帰つてから、毒が利きき始めたのか」

「え」

「河豚の残りがあるだろう、生なまでも煮たにのでも構わねえ、チヨイと見せて貰おうか」

平次は妙に執拗しつように突つ込みます。

「それが、その残つたのを、皆んな竹の皮に包んで持つて行つてしまいました」

「吉三郎は河豚をちよいちよいやるのかい」

「いえ、生れて初めてだそうで、ひどく嫌がつて居りましたが、二人に笑われて我慢に食べたようです。でも、一と箸はし二た箸食い始めると、——こりや飛んだうまいや、鮫鰾あんこうそっくりだ——そんな事を言っていました」

「鮫鰾そっくりと言ったのかい」

「それから酒の味がどうも変だ、舌のせいかしらとも言っていました」
女房のお由は進まない様子ながら、問わるるままに説明しました。

「三人で一つ鍋なべを突つついたのだらうな」

「え、それなのに、中あたつたのが一人は情けないじゃありませんか」

「二人が無事とどうしてわかった」

「何処で噂を聞いたか、今朝お二人はあわてて飛んで来ました。御近所の衆も御存じですが、何か宿が預かったものがあるとか言つて、仏様の懐までかき廻

して行きましたか——」

「それが見付かったのかい」

「そこまでは解りません」

話が次第にこんがらかって、そして微妙になって行きます。

「おや？ この脇差ですよ、親分」

ガラツ八は死骸の枕元に置いてあった、魔除まよけの脇差を取上げました。言うまでもなく三日前にガラツ八が吉三郎に売った、十両あかい、わしまるの赤鰯丸あかい、わしまるです。

「そいつには大した用事がなかったんだよ。ところでお神さん、毒は何刻どきほど経って利き始めたんだ」

「鍋が空になると、二人のお客はすぐ帰りました。それを送って出ると、上かまちり框で引かまちつくり返った切り——」

「やはり身体しびが痺しびれたんだね」

お由の声が涙に途切れるのを、平次は慰め顔に言うのでした。

「いえ、痺れもどうもしません。急に腹の中へ火が付いたようだと言って、目も当てられない苦しみをしましたが、とうとう黒血を吐いて夜明け前に息を引取りました」

「医者は何？」

「町内の玄道げんどうさんに診みてもらいましたが。何の役にも立ちません」

お由はこれだけ言うのが精いっぱいでした。平次の問いが途切れると、吉三郎の死骸に獅し噛がみつくように、時々は声を立てて泣いて居ります。

四

「親分、河豚汁ふぐじるじゃ十手捕縄にも及ばないじゃありませんか」

吉三郎の家を出ると、ガラツ八はもう天下泰平たいへいの顔になつていたのでした。

「手前はそう思うのか」

「だつて親分」

「だから幾年経つても、大物は拳あがらねえのさ」

銭形平次は八五郎の鈍骨どんこつを慫あわれむともなく、こう言うのでした。

「へエ——、すると、何か変なことでもあるんで？」

「その辺に居る町内の人達に、今朝吉三郎の家へ来た、二人連れの人相を訊く
がいい。その辺が手繰たぐりどころだ」

「へエ——」

ガラツ八は吉三郎の家の裏口へ廻りましたが、やがて、狐につままれたよう
な顔をして戻つて来ました。

「どうした、八？」

「変ですぞ、親分。今朝ここへやって来て、仏様の懐までかき廻して行ったのは、三十前後の凄^{すじ}い年増と、四十恰好の浪人者らしい男だそうですね」

「それ見るがいい」

「吉三郎夫妻とは余っ程昵懇^{じっこん}の様子で、時々この家へ来るそうですね」

「所、名前は？」

「そいつは解らねえ、——お由を締め上げてみましょうか」

「無駄だよ、止すがいい。それに亭主の死骸の側で手荒なことをしちや、いかに御用でも寝醒^{ねざ}めがよくねえ」

「親分は相変らず弱気だ」

「それでいいのさ、気が強くて考えが浅かった日にや、岡っ引は罪ばかり作るよ」

平次はそんな事を言いながら、町内の本道、町野玄道を訪^{たず}ねました。

吉三郎毒死の顛末てんまつを細々こまこまと訊くと、

「親分、あれはどうも腑ふに落ちないよ、河豚ふぐの毒ばかりではなかつたようだ」

「すると、何か外の毒でも盛られた様子で？」

「いや、そう言うわけじゃない。第一あんな激しい毒薬は、江戸中の生薬屋きぐすりやを
搜したつてない、——南蠻物なんばんものなら知らないが——」

「南蠻物？」

「やはり河豚にして置く外はあるまい。三人で食あつて一人しか中あたらないという
のは、河豚の外にはないことだ。鍋なべの中に外の毒が入っていたなら、三人が三
人ともやられる筈だ」

玄道は大きな坊主頭を振るばかりです。

平次とガラッ八はもう一度吉三郎の家へ戻りました。が、お由はもう白い眼
を見せるだけで、二人の問いにもろくに答えてはくれず、親類縁者も、友達も

ない様子で、話を手ぐり出す工夫もありません。

「お神さん、もう一つ二つ訊きたいが、お前さんところの宗旨しゅうしは何だえ」

平次はつかぬ事をきくのでした。

「門徒もんとですよ、今お寺様が来ますから、お宗旨の事ならそっちへ訊いて下さい」
少し剣もほろろです。

「江戸には親類もないんだね」

「あつたつて遠い身寄は音信不通で、附合っちゃくれません。尤も長崎には亭や主どの弟が居ますが、お葬式とむらいに間に合うわけはなし」

「そいつは気の毒だ」

そんな事を言いながら、家の中を念入りに見ましたが、ひどく裕福ゆうふくらしいという外には、何の変ったところもなかったのです。

「吉三郎は遊び人で通っていたが、勝負事は好きじゃなかったそうだ。立入っ

たことを訊くが、世過ぎは何でやって居たんだ」

平次の問いはかなり突っ込みます。が、

「私にも解りませんよ。金の成る木でも持って居たんでしよう」

お由は空嘯そらうそぶいて相手にしそうもありません。

「もう一つ、三日前に八五郎が、この脇差と牙彫けぼりの根附ねつけを一つ、十両で吉三郎に売ったそうだ。少しわけがあつて、それを返して貰いたいんだが」

平次は十両の金をお由の前に押しやって、相手の出ようを待ちました。

「勝手にその脇差を持って行って下さい。尤も牙彫もつとの根附なんかは知りませんよ」

「確かに持っていた筈だが——」

「親分も、仏様の懐が見たいんでしよう。勝手にするがいい、馬鹿馬鹿しい」
お由は気が立って居るらしく、こう言つてパイと座を立ちました。

「見ましようか、親分」

立ちかかる八五郎。

「無駄だろう、今朝抜かれてしまったよ、——あかいわしまる赤鰯丸なんか持って行っても仕

様があるまい、——十両の金さえ返しゃ気が済む。さア帰ろうか、八」

平次はもう何の未練みれんげ気もなく立ち上がるのでした。

五

その日半日、平次はどこともなく飛んで行ってしまいました。ガラツ八は吉三郎の家を宵まで見張りしましたが、町内の百万まんべん遍の講中が来たのと、お通つや夜の

小坊主が、お義理ぎよだけの経きょうをあげた外には、何の変りもありません。

フラりと平次の家へ来たのは亥よつ刻少し過ぎ、食わず飲まずで見張っていてひ

どく疲つかれて居ります。

「親分は？」

「まだ戻りませんよ。入って待っていて下さいな、八さん」

お静しずの蟠わたかまりない調子に、八五郎はいつものようにヌツと入って長火鉢の前に
頬杖ほほづえを突きました。

「何処へ廻ったろうなア」

「お支度は、八さん」

お静はそれに構わず、腹の減っているらしい八五郎の顔を、少し遠くから鑑かん
定ていしております。

「親分が帰ってから御馳走になりましたよ」

ガラッ八にも矢張り遠慮はあったのです。

「それじゃ、せめて一本爛つけましょう」

「へエ、——変なことがあつたもので——」

「まア、八さん、たまにはお酒くらいはありますよ。——ツイ先刻、八丁堀の旦那から、心祝いがあるからと、わざわざ一升届けて下さいましたよ」

「そいつは豪儀だ、——さすがに笹野の旦那は気が付くぜ、へッ、へッ」
八五郎はすっかり相好を崩くずしてしまいます。

お静はその間に、銅壺どうこに突っ込んだ徳利を拭いて、八五郎の前に据すえた膳の上へ、そつと載のせてやりました。元は水茶屋に奉公していたお静ですが、さすがに夫の留守に、子分の酒の酌しやくまでしてやるのを憚はばかつたのでしよう。

「済みません」

「なアに、此方が勝手なんで、有難てえな。ト、ト、ト、散ります散りますと来やがる。へッ、へッ、良い色をしているぜ」

グツと喉のどを鳴らしながら、猪口ちよこの手を胸のあたりまで持って行った八五郎。

「待ちな、八」

ガラリと格子が開きました。銭形平次が帰って来たのです。盃さかずきを膳へおくかと思つた八五郎の手は、意地汚くそのまま唇くちへ——。

「あッ」

八五郎の手をハタと打つたものがあります。盃は後ろに飛んで、パツと胸から膝へ飛散る酒。平次の煙草たばこ入が飛んで来たのでした。

「親分」

八五郎の声にも怒いかりがあります。

「馬鹿ッ、そいつを呑のむと命がねえぞ」

「えッ」

「今路地の外まで帰けえつて来ると、変な野郎がウロウロして居るから、様子を見ているうちに、お静の話を聞いてしまったよ、——八丁堀の旦那が、心祝いに

酒を下すつたなんて、そいつは大嘘だ。俺はつい先刻まで、八丁堀に居たんだから、お酒を下さるなら、そんなお話の出ないわけはねえ。心祝いどころか、笹野の旦那は明日は先代様の法要で、牛込のお寺まで行かなきゃならないと言つて居なすつたよ」

そう言いながら平次は、埃も叩かずに入り込んで、黙つたままお静の差出す樽を受取つて眺めました。

「親分、そ、そいつは本当ですかえ」

「嘘だった日にゃ、俺は八に申訳がねえことになる。これを見るがいい、樽は町内の酒屋のだ。八丁堀から届いたのではない証拠は、この^{ますさだ}定の印^{しるし}で判るだろ」

「――」

八五郎もそう言われると、口もきけません。

「危いところだ。八、そいつをひと猪口呑んだだけで、手前は俺の身代りに、血へどを吐いて死ぬところよ」

「――」

「だが、癩にさわる野郎じゃないか。この平次を鱒と間違えやがって」

「誰がこんな事をしたんで、親分」

八五郎はようやく人心地がつかしました。

「吉三郎を殺した奴だよ」

「じゃ河豚？」

「馬鹿、河豚が酒を買って、届けるかよ」

「さア解らねえ」

「俺も解らねえが、こいつは大変な曲者だ。退治しなきゃ御府内の難儀、お上の御威光にも拘わる。来い、八。今晚のうちに埒をあけてやる」

「へエ——」

八五郎は平次の劍幕に釣られて、モソモソ立上がりました。

「お静、その酒は匂いを嗅いでもならねえよ。封印をして大事にしまつて置け」

「ハイ」

言い捨てた平次。その足で駆け付けたのは、町内の酒屋升定ますさだでした。番頭に訊くと、

「いい年増でしたよ。一番良いのを一升量はからせて、小僧に持たせてやりましようと言うと、イヤ、それには及ばない、私が持つて行かなきゃ、親切が届かないって」

「その女は三十前後の——」

「おおたな大店の御新造といった風でした。頭巾を冠かぶつて居るので、髪形はわかりませ

んが」。

「有難う、飛んだ手数だった」

平次は外へ出ると、真つ暗な師走しわすの空を仰いで、大きく息をしました。見えざる敵のしたたかさを改めて犇々ひしひしと感じた様子です。

六

「お神さん、そいつは間違いだぜ。吉三郎は河豚ふぐで死んだんじゃねえ、立派に毒害どくがいされたんだ」

通夜の人数を追っ払って、八五郎に見張らせた平次は、吉三郎の死骸を中におよと膝詰め談判を始めたのでした。

「まさか、親分」

お由は容易よういに信じそうもありません。

「証拠はいくらでもある。第一、昨夜三人で食ったのは、河豚ふぐじゃない鮫鱈鍋あんこうなべだ、吉三郎が河豚を食ったことがないと言うから、鮫鱈を持って来て、河豚と
いうことにして食わせたんだ。鮫鱈鍋で死ぬ気遣いはないが、河豚なら随分三
人のうち一人死ぬということがない——、彼奴らは其処を狙ったんだ」

「——」

「残った魚を竹の皮包にして持って帰ったのは、後で鮫鱈あんこうと判っては面白くな
いからだ。それから、河豚の毒なら身体が痺しびれる筈だが、そんな事がなくて、
腹の中が焼け爛ただれるようで、血を吐いたのは南蠻渡りの毒薬なんばんわたに違いない。玄道
さんもそう言っている」

「——」

「毒は、吉三郎の盃の中に入れて居たんだ。多分、ちよいと立った時か何か、
投げ込まれたんだろう。——その証拠は、昨夜は三人共、盃のやり取りはしな

かつた筈だ」

「えッ、そ、その通りですよ。親分。いつも差したり差されたりするのが、ゆべは最初から御家人喜六の言い出しで、盃のやり取りなし、うんと食って飲もうということにしたようでした」

「それ見るがいい。お前の配偶つれあいは、その御家人喜六と、もう一人の年増に殺されたんだ。今夜は俺のところへまで毒酒を持込みやがったよ。放ほおっておくと何をやり出すか解らない」

「えッ」

「解ったか、お神さん。夫の敵を討つ気はないのか」

「畜生ッ、そうとは知らずに、——私は亭主やどに口止めされたのを守って、今までの二人を庇かばってばかりいました、——敵を討って下さい。親分さん」

お由にも、ようやく事件の全貌ぜんぼうが解った様子です。

「それにしても相手の素姓すじょうが解らなくちや、敵の討ちようがない。あの女は何だい」

「唐人お勇とうじんという大変な女ですよ」

「三人で何かやって居た筈だが——」

「何か大仕事をしているようでしたが、私には言ってくれませんか」

お由は全く何にも知らない様子でした。

「仲間はたった三人切りか」

「子分は二三十人ある筈です」

「ね、お神さん。仏様のことを悪く言うわけじゃないが、吉三郎はその御家人喜六と唐人お男かたんに荷担かたんして大変なことをやって居たんだ」

「——」

「俺の見当では、多分拔荷あつかを扱って居たのだと思う、——拔荷あつかという何でも

ないようだが、こいつは大変な御法度で、露顕すると獄門にも磔刑にもなる」

「自分の栄華のために、紅毛人に御国の宝をやつて、厄体もない贅沢な品物を買入れ、それを三倍五倍の利潤で、金持や物好きな人間に売り付けるのだから、抜荷扱いは商人の風上にも置けねえ、屑のような人間だ」

「お国の宝の大判小判、あれを紅毛人は命がけで欲しがるそうだ。だから、命知らずの紅毛人は、羅紗だの、ビードロだの、いろいろの小間物だの、あまり生活の足しにならぬ物を持込んで、この国の大判小判と換えて行くのだ。長崎ではお役人の目がやかましいから、九州の沖で日本の船に積換え、米や炭の荷に交せて、公方様お膝元へ持って来るに違いない。江戸へは諸国の荷が集まるから却つてわからない道理だ、——現にお前の夫の吉三郎を殺したのも、その

ぬけに
拔荷で入った南蠻秘法の毒薬だ」

平次の舌は焰ほのおのように燃えます。

「親分さん」

「私欲のために掟おきてを破り、その上、人まで殺すような悪者は放つては置けない。お前の知ってることがあったら皆な言ってくれ、許しておけない奴らだ」

「親分さん、皆んな申上げます」

「それは良い心掛だ。夫の罪亡ぼしにもなるだろう」

「仏は何んにも知りません、——でも、船の入る時の合図あいずだけは知っています。

——ときどき見張りをさせられましたから」

「有難い、それが解りや」

「——」

お由は声こゑを潜ひそめました。

七

その晩神田の平次の家は焼けたのです。

こればかりは、銭形平次も気が付かなかったのでしよう。毒酒の計略けいりやくは見事に見破りましたが、それだけで油断をしていると、その夜の丑刻半頃やつ、三方からあがった火の手は、瞬またたく間に平次の長屋を焼き落し、近所の二三軒を半焼にして、ようやく納まったのでした。

風がないのと、暮の街で注意が行届いたので、これ丈だけで済んだのは不幸中の幸いでしたが、困ったことは、肝心かんしんの銭形平次が、それっ切り行方不知しれずになつてしまったことです。

——銭形の親分が焼け死んだとよ——

——表裏の戸口は外から閉めてあつたそうだ、お静さんが命からがら逃げ出したというぜ——

そんな噂が八方から飛びました。全く、焼跡やけあとにシヨンボリと立っている、気の抜けたようなガラツ八の姿や、顔から腕へかけて、晒木綿さらしめんで巻かれた、痛々しいお静の様子を見ると、銭形平次が死んだというのも、満更うわさの噂ばかりではない様子です。

昼頃には八丁堀の与力笹野新三郎も来ました。江戸中の顔の良い御用聞も、五人十人と集まって来て、夕方には、それが二三十人になり、打ち湿しめった様子で、ポツポツと烟けむる灰を搔かせて居ります。

日が暮れると、平次の遺骸を板囲いたがこいの中から運び出し戸板のに載せて、回向院えこういんに移しました。江戸中の名ある御用聞手先が二三十人、笹野新三郎と一緒に、それに従したがったことは言う迄ありません。

その晩の戌刻半頃、この一行は回向院の寺内に入り、そこでお通夜が営まれたのです。

同じ夜、子刻過ぎ、永代のあたりから漕ぎ上がった伝馬が一艘、浜町河岸に来ると、船頭が舳の灯を外して、十文字に二度、三度と振りました。

師走二十九日、漆のような闇の中に、その光が水を渡って走ると、何処からともなく河岸に集まった人数がざつと二十人ばかり。

「変な時船が入ったものだね、お首領」

「宵のうちに、永代から合図があつてびっくりしたよ、——今ごろ入る船はない筈だが、春になってから来るといふのが、何かの都合で早く入ったんだろう」
そう言った囁きが、彼方、此方に交されます。

「それよ、板を渡してくれ」

「おい」

「酒の荷が先か米の荷が先か」

「明日はおおみそか大晦日だ、酒の荷を先にしてくれ。三河屋も、長崎屋も来て居るぞ」

いつの間にやら、屋号を入れた提灯が二つ三つ用意されました。屈強くつきょうな若者達が、船から運び出す荷を、陸おかに待って居る人足が、言葉少なに受取って、何処ともなく姿を消します。

船の中の荷物はザツと二十七八。その全部を運び終ると、後に残ったのは、頭巾ずきんを目深かぶに冠かぶった男と女の二人でした。

「これでよし、帰ろうか」

「帰りましよう」

歩みうづを移す二人の前へ――、

「御用ッ」

ヌツと突つ立ったのは八五郎のガラッ八です。

「何？」

「御家人喜六、唐人お勇、神妙にせい」

パツと組付いて行くガラッ八、お勇は身をかわして、トンと肩のあたりを突きました。

「ワッ」

二三步泳いで立直るガラッ八。その後ろから、

「えいッ」

御家人喜六の一刀が闇を劈くのを、

「俺が相手だ、来いッ」

横合から飛込んだ十手が、ガツキと受止めました。

「邪魔だッ」

「拔荷ぬげの悪事、吉三郎殺しにんの下手人げしゅにんまで露頭ろけんしたぞ。観念くわんねんせいッ」

「何をッ」

御家人喜六は、お勇を後に庇かばって、一刀を闇に構えます。

「御用ッ、御用ッ」

八方から、ヒタヒタと詰めよる捕方とらふりの人数。

「えッ、寄るな寄るな、一人残らず切きって捨すてるぞッ」

御家人喜六の腕は拔群ぼつぐんでした。

「伝馬でんばは此方こなたで仕立てた偽物にせものだ、仲間なかまは一人残らず生捕なまとらられたぞ。神妙しんめうにお縄なづなを頂戴ちやうたいせい」

先刻さきごころ、船から揚げた荷物を、一つ一つ担かついで行った子分こぶんは、回向院くわういんに通夜つうやをするしよと見せかけた、江戸中えどなかつの手先てのさきに、一人残らず後あとを跟つけられ、落着おちく先さきで縛ばくられたとは、御家人喜六ごけにんきりくもまだ知らなかつたでしょう。

「えッ、其方どもに縛しばられる喜六ではない、退け退け」

サツと身を翻かえすと、眼にも止まらぬ早業で、早くも二三人の捕方は浅傷あさでを負わされた様子。

「油断するなッ」

後ろから激励の声を掛けたのは笹野新三郎です。

「灯あかりだッ」

誰やらの声に応じて、どこに隠してあったか、十幾つの御用の提灯が、一度にパツと二人の曲者を照します。

「あつしが行きましょう。この野郎には家を焼かれた怨うらみがあります」
パツと飛出した美丈夫。

「平次だ、平次だ」

捕物陣は二つに割れて、その道を開きました。

「生きていたのか平次、命いのち冥みょう加がな奴やつだ」

苦にんりする御家人喜六、右手やいばの刃は、油断なく灯にギリリとうねります。

「手前のすることは一々卑怯ひきようだ、我慢のならねえ野郎だ」

そう言う口を塞ふさぐように、喜六の刃はサツと伸びます。

「おっと危ねえ、——これでも食やがれ」

平次の右手が拳あがると、夜風を剪きって銭が一枚、御家人喜六の唇くちへ——。

「已れッ」

僅かに刃の平で受けましたが、二枚目は強したたかに頬骨へ、三枚目は額へ、——

眼へ——。

「野郎ッ」

ひるむ後ろから、無手むずとガラッ八が組付いて居たのです。

「危ねえ、八」

錢形平次はおどろいて飛込みました。喜六の後にいる唐人お勇は、あいくちヒ首を抜いて、ガラツ八の脇腹へサツと突いて出たのです。

平次は危うくそれを突飛ばすと、お勇のヒ首は飛龍ひりゆうの如く平次の胸へ飛んで来たのでした。それをかわして、

「女、いい加減にしろッ」

飛付く平次。その手を払ってお勇の身体は、大川の寒水へ、水音高く飛込んでしまいました。

×

×

「変な捕物だったね、親分」

その帰り路、柳原土手でガラツ八はこう誘さそいかけました。

「脇差を十両に売ったのが始まりさ。てめえ手前が感のいい人間で、吉三郎の心持を讀むと、こいつは危ないことだったよ」

平次は面白そうです。

「へエ——」

「まだ判らねえのか、——手前に抜荷ぬけにを揚げる現場を見られたから、大なまくら、を十両で買ってな、手前てまえの御機嫌を取ったのさ、——見て見ぬ振りをしてくれという謎さ」

「なアーる」

「今ごろ感心する奴があるものか、十両の元手をただ取られたようなものだ」

「へエ——」

「あの牙彫けぼりの根附ねつけは、多分抜荷を受取る手形のようなものだろう。吉三郎は仲間では三下さんしただが、あの牙彫の手形を手前てまえのところから見付けて持って行くと、急に頭領かしらの株を狙って、抜荷おおもの大儲けを一人占めにしようという大望を起したのさ」

「ハッハッハッ、ハッハッ」

柳原土手の夜は白みかけて居りました。

大晦日おおみそかの江戸の街は、一瞬しゅんてんごと転毎に、

幾百人かずつ最後の足掻あかきの埧つぼ埧ぼの中に、眼を覚さまさして行くのでしよう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十三年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第四卷 河出書房 昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行 銭形俱樂部

鉄砲汁



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>